

十字架挙栄祭

大連禱 に続いて

第一アンティフォン、第二調、(第21聖詠)

ソロ (附唱) 救世主や、生神女の祈禱に因りて我等を救ひ給へ。

(詠) (附唱) **救世主や、生神女の祈禱に因りて我等を救ひ給へ。**

リフレイン

救世主や 生神女の祈禱によって、我等を救いたまえ

ソロ (第一句) 我が神よ、我が神よ、我に聴き給へ、何ぞ我を遺てたる。

(詠) (附唱) **救世主や、生神女の祈禱に因りて我等を救ひ給へ。**

ソロ (第二句) 我が呼ぶ言は我が救より遠し。

(詠) (附唱) **救世主や、生神女の祈禱に因りて我等を救ひ給へ。**

ソロ (第三句) 我が神よ、我晝に呼べども、爾耳を傾けず、夜に呼べども、我安きを得ず。

(詠) (附唱) **救世主や、生神女の祈禱に因りて我等を救ひ給へ。**

ソロ (第四句) 然れども爾聖者はイズライリの讃頌の中に居るなり。

(詠) (附唱) **救世主や、生神女の祈禱に因りて我等を救ひ給へ。**

ソロ 光栄は父と子と聖神に帰す、今も、何時も世々にアミン

(詠) (附唱) **救世主や、生神女の祈禱に因りて我等を救ひ給へ。**

小連禱

輔祭 我等復又安和にして主に禱らん、 (詠) 主 憐めよ

輔祭 神や、爾^{なんじ}の恩寵を以て、我等を^{たす}助け救い^{まも}憐み^{まも}護れよ、 (詠) 主 憐めよ

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に^{ことごと}悉くの我等の^{いのち}生命を以て、ハリストス神に委託せん、 (詠) 主^{なんじ} 爾に

司祭 (高声) 蓋^{ひんがし}権柄及び国と権能と光栄は^{なんじ}爾父と子と^{せいしん}聖神に帰す、今も何時も世々に、(詠)「アミン」

第二アンティフォン、第二調、(第73聖詠)

ソロ (附唱) 神の子、身にて釘せられし主よ、我等爾に「ア ril ルイ ヤ」を歌ふ者を救ひ給へ。

(詠) (附唱) 神の子、身にて釘せられし主よ、我等爾に「ア ril ルイ ヤ」を歌ふ者を救ひ給へ。

ソロ (第一句) 神よ、何すれぞ永く我等を棄てたる。

(詠) (附唱) 神の子、身にて釘せられし主よ、我等爾に「ア ril ルイ ヤ」を歌ふ者を救ひ給へ。

ソロ (第二句) 爾が古より獲たる会を記憶せよ。

(詠) (附唱) 神の子、身にて釘せられし主よ、我等爾に「ア ril ルイ ヤ」を歌ふ者を救ひ給へ。

ソロ (第三句) 爾が居る所の此のシオン山を記憶せよ。

(詠) (附唱) 神の子、身にて釘せられし主よ、我等爾に「ア ril ルイ ヤ」を歌ふ者を救ひ給へ。

ソロ (第四句) 神我が古世よりの王は救を地の中に作せり。

(詠) (附唱) 神の子、身にて釘せられし主よ、我等爾に「ア ril ルイ ヤ」を歌ふ者を救ひ給へ。

ソロ (6調) ソロ 光栄は父と子と聖神に帰す、今も、何時も世々にアミン

(詠) 神の^{どくせい}獨生の子 並びに^{ことば}言よ、

死せざる者にして、我等を^{すく}救はん為に^{あまん}甘じて^{えいていどうじよ}聖なる生神女、永貞童女マリヤより^か身を取り、

神の性を易えずして 人と為り、十字架に^{くぎ}釘うたれ、

死を^{もつ}以て 死を踏み破りし ハリストス神よ、

聖三者の^{せいさんしや}一として、^{いつ}

父 及び ^{せいしん}聖神と共に ^{さんえい}讚榮せらるる (の) 主よ、我等を 救い給え。

小連禱

輔祭 我等復又安和にして主に禱らん、

(詠) 主 憐めよ

輔祭 神や、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

(詠) 主 憐めよ

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光荣の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

(詠) 主 爾に

司祭 (高声) 蓋権柄及び国と権能と光荣は爾父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

第三倡和詞、第一調、第 98 聖詠。

ソロ (讚詞) 主よ、爾の民を救ひ、爾の業に福を降せ、我が国にさいわいを与え、爾の十字架にて爾の住處を守り給へ。

(詠) (讚詞) 主よ、爾の民を救ひ、爾の業に福を降せ、我が国にさいわいを与え、爾の十字架にて爾の住處を守り給へ。

トロバリ 1 調

主や、なんじの たみを すくい なんじの業に福をく だ せ

我がくにに さいわいを あたえ なんじの 十字架にて

なんじの 住まいを守りた ま え

ソロ (第一句) 主は王たり、諸民戦くべし。

(詠) (讚詞) 主よ、爾の民を救ひ、爾の業に福を降せ、我が国にさいわいを与え、爾の十字架にて爾の住處を守り給へ。

ソロ (第二句) 主は王たり、諸民戦くべし、彼はヘルウィムに坐す、地は震ふべし。

(詠) (讚詞) 主よ、爾の民を救ひ、爾の業に福を降せ、我が国にさいわいを与え、爾の十字架にて爾の住處を守り給へ。

ソロ (第三句) 主はシオンに在りて大なり、彼は萬民の上に高し。

(詠) (讚詞) 主よ、爾の民を救ひ、爾の業に福を降せ、我が国にさいわいを与え、爾の十字架にて爾の住處を守り給へ。

ソロ (第四句) 主に其の美しき聖所に伏拝せよ。

(詠) (讚詞) 主よ、爾の民を救ひ、爾の業に福を降せ、我が国にさいわいを与え、爾の十字架にて爾の住處を守り給へ。

聖入

輔祭曰く、睿智、肅みて立て。聖入の句、主我が神を崇め讃め、其の足臺に伏し拝めよ、是れ聖なり。

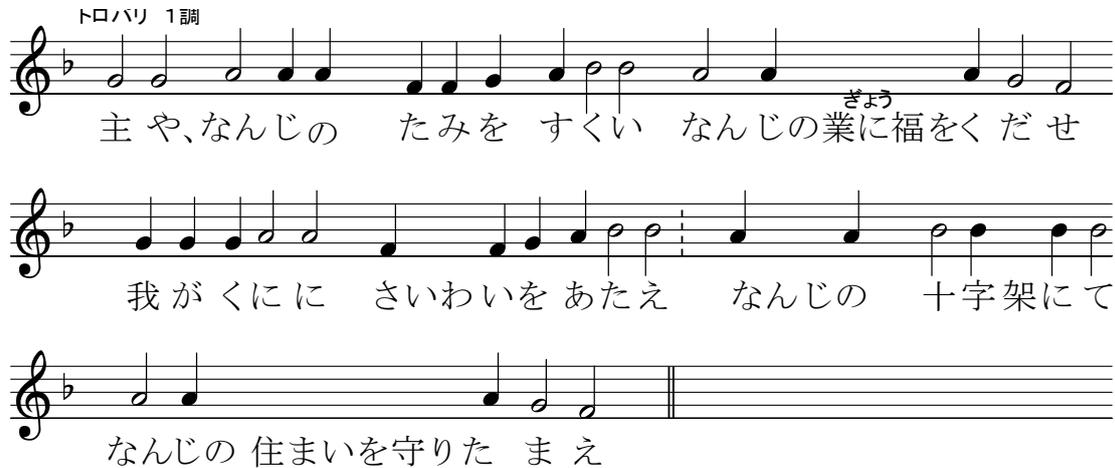
全員 来たれハリストスの前に伏し拝まん、
神の子、肉体にて十字架に釘せられし主や、
爾にアリライヤを奉る者を救い給え



来たれ^ハリス^トスのま えに伏しおがまん かみの子
肉体^{ニクタイ}にて十字架にていせられし主やなんじにアリ
ルイヤをたてまつるもの をすくいたま え

トロパリ コンダク (第3アンティフォンと同じ)

全員 (讃詞) 主よ、爾の民を救ひ、爾の業に福を降せ、我が国にさいわいを与え、爾の十字架にて爾の住處を守り給へ。



トロパリ 1調
主や、なんじの たみをすくい なんじの業^{ぎょう}に福をくだけせ
我がくにに さいわいをあたえ なんじの 十字架にて
なんじの 住まいを守りた まえ

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

コンダク 4 調

甘じて十字架に上げられしハリストス神よ、爾が同名の新なる住處に爾の慈憐を賜へ、
爾の力を以て我が国を司る者を樂しましめて、彼に敵に勝たしめ給へ、彼は爾のたすけとし
て平安の武器、勝たれぬ旗^{なま}を有てばなり。

コンダク 4調 オヒホード

光 栄は父と子と聖神に 帰 す 今もいつも 世世に アミン

甘んじて十字架に挙げられし ハリストス かみ よ

爾が 同名の あら たなる住まいに 爾の慈憐をたま え

なんじの力を以て 我が国を楽しませしめ て敵に勝たしめ たまえ

彼は爾の援助^{たすけ}として 平安の武器 勝たれぬ旗を^{たも}有てばなり

聖三祝文の代わり

全員 主宰よ、我等爾の十字架に伏拝し、爾の聖なる復活を讃栄せん。(3回)

主さいよ われ らなんじの 十字架に 伏^{ふく}はいし

なんじの 聖^{せい}なる 復活^{ふくかつ}を 讃^{えい}栄せん (3回)

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン

爾の聖なる復活を讃栄せん。

主宰よ、我等爾の十字架に伏拝し、爾の聖なる復活を讃栄せん。

ポロキメン、第七調。

主我が神を崇め讃め、其足臺に伏し拝めよ、是れ聖なり。

ポロキメン 7調



句、主は王たり、諸民戦くべし。

使徒の誦読 コリント書百二十五端、

兄弟よ、十字架の言は滅ぶる者の為には愚なり、我等救はるゝ者の為には神の能なり。蓋録して云へるあり、我智者の智を滅し、識者の識を廃せん。智者は安にか在る、学士は安にか在る、此の世の辯論者は安にか在る、神はこの世の智慧を愚に為らしめしに非ずやと。蓋世は其智慧を以て、神を神の智慧に於て識らざりしに由りて、神は傳道の愚を以て、信ずる者を救はんことを喜べり。蓋イウデヤ人は休徴を乞ひ、エルリン人は智慧を覓む、然れども我等は十字架に釘せられしハリストスを傳ふ、此れイウデヤ人の為には礙、エルリン人の為には愚、惟召されたる者の為には、イウデヤ人及びエルリン人を論ぜず、ハリストスは神の能及び神の智慧なり。

(新共同訳) 十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。それは、こう書いてあるからです。「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さを意味のないものにする。」知恵のある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたのではないか。世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっていません。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまづかせるもの、異邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。(1コリ 1:18-24)

アリルイヤ、第一調、

爾が古より獲たる会を記憶せよ。

句、神我が古世よりの王は救を地の中に作せり。

1調



司祭 (高声) 睿智肅みて立て、聖福音経を聴くべし、
衆人に平安、

(詠) 爾の神にも、

輔祭 (某) 伝の聖福音経の読、

(詠) 主や、^{なんじ} 光栄は 爾に 帰す、^{なんじ} 光栄は 爾に 帰す、

福音經の誦読 イオアン六十端。

彼の時司祭諸長と長老等と相会して、イイススを殺さんことを定め、彼を曳きてピラトに至りて曰へり、之を去れ、之を去れ、十字架に釘せよ、十字架に釘せよ。ピラト彼等に謂ふ、爾等彼を取りて、十字架に釘せよ、蓋我彼に罪めるを見ず。

イウデヤ人答へて曰へり、我等に律法あり、我が律法に据れば、彼は死すべし、蓋己を神の子と為せり。ピラト此の言を聞きて、益懼れたり。復公廨に入りて、イイススに謂ふ、爾は奚れよりする。然れどもイイスス彼に答を為さざりき。

ピラト彼に調ふ、我に言はざるか、爾豈我に爾を十字架に釘する権あり、亦爾を釈す権あるを知らざるか。イイスス答へて曰へり、上より爾に與へられしに非ざれば、爾我に對して一も権あるなし、ピラト此の言を聞きて、イイススを外に曳き出し、審判座に、「リフォストヲトン」、エウレイの言にガウワファと名づくる所に坐せり。其日は逾越節の備日にして、時は約六時なり。ピラトイウデヤ人に謂ふ、視よ、爾等の王なり。

然れども彼等號びて曰へり、之を去れ、之を去れ、十字架に釘せよ。ピラト彼等に謂ふ、爾奪の王を釘せんか。司祭諸長對へて曰へり、我等にはケサリの外に王なし。

其時ピラト彼を十字架に釘せん為に付せり。

彼等イイススを取りて、曳き行けり。彼己の十字架を負ひ、出で、髑髏の處、エウレイの言にゴルゴファと名づくる所に至れり。彼處に在りて彼を十字架に釘せり、又二人を彼と偕に釘せり、一は右、一は左、イイスス中に在り。ピラト標を書して、十字架の上に置けり、書して云く、イイススナゾレイ、イウデヤ人と王と。イウデヤ人の多くの者此の標を讀めり、蓋イイススの釘せられし處は城に近かりき、其標エウレイ、グレチヤ、ロマの文を以て書されたり。

イイススの母と、母の姉妹クレヲパの妻マリヤと、マリヤ「マグダリナ」と、其十字架の旁に立てり。イイススは其母及び愛する所の門徒の此に立てるを見て、母に謂ふ、婦よ、視よ、爾の子なり。次ぎて門徒に謂ふ、視よ、爾の母なり。其時より此の門徒彼を己の家に取れり。厥後イイスス一切の事已に成りたるを知りて、成れり。乃首を俯して、神を付せり。

其日は備節日にして、彼の安息日は大なる日なるに困りて、イウデヤ人は安息日に屍を十字架に留めざらん為、ピラトに、彼等の脛を折りて、屍を取り下さんことを請へり。

故に兵卒來りて、彼と偕に十字架に釘せられし第一の者の脛を折り、第二の者にも亦然せり。イイススに來りて、其已に死したるを見れば、彼の脛を折らざりき、

然れども一人の兵卒戈を以て其の脅を刺せり、忽血と水と出でたり。見し者は證を作せり、其證は眞なり、

(詠) 主や、^{なんじ} 光榮は爾に歸す、^{なんじ} 光榮は爾に歸す、

以下、「常に福」まで主日聖体礼儀と同じ

常に福に代えて(ズナメニイ・チャントから)

Sputnik psalmoschika

我がたましいよいと尊とき主の十字架を
 讃めあげよ 生神女よなんじは奥密なる
 らく園 耕さくせられずしてハリストスを
 生育せしものなり 彼は生命のちをほどこす
 十字架の木を地上に植えたまえり
 ゆえにいまこれを挙ぐるとき
 我等これをおがみてあが—め讃—む

頌聖詞 聖詠 4:7

主よな—んじのか—んばせの
 ひかりはわれらにあらわれたり
 ア—リル—イヤ ア—リル—イヤ
 アリル— — — — — イヤ